

2 R・リバンド

●マルクス主義政治学の再解釈

加藤哲郎

# 1 はじめに

現代政治学の中心が、アメリカ合衆国で開発された「行動科学的政治学」であり、そこで共有されていた信条が、アメリカ社会の影を宿した多元主義モデルの優越性であったとすれば、今日、政治学の理論世界は、確かな変動期に入っているといえるであろう。一九六九年のアメリカ政治学会年次大会でのD・イーストン(D. Easton)の会長演説が「脱行動論」の先駆けであったとすれば、八一年年次大会でのC・E・リンドブロム(C. E. Lindblom)の会長演説は、「国家論なき政治学」を支えてきた多元主義的信条を保持したまま対象を「国家」にしほりこまざるをえなくなつた、支配的政治学のジレンマと模索を、象徴しているといえるであろう。七〇年代後半に、アメリカ政治学会は、アメリカ他の学会に比しても顕著な会員数の減少(七四年に比して八二年には正会員で二五%、学生会員五〇%、団体会員一〇%の減)を記録した<sup>(1)</sup>。アメリカの政治学者たち自身によって、七〇年代に「最も貢献をした」政治学者とされたのは、かの『自由主義の終焉』のセオドール・J・ローウイ(Theo. J. Lowy)であった<sup>(2)</sup>。そのローウイらが企画した八一年年次大会の共通テーマが「国家論の復権」であり<sup>(3)</sup>、リンドブロムの会長演説も、この脈絡の中で、意味づけられる。彼は、アメリカ政治学の主流が、初期の活力を失つたことを、認める。ヨーロッパの政治学が、ネオ・マルクス主義者を中心とした「ラディカルズ」の思考を吸収して発展しつつあることを、認める。伝統的理論が、アメリカではなお圧倒的多数派であることは確かである。「しかし、われわれの多くは、われわれの学生たちのいくぶつている。彼らは、ハーバース(J. Habermas, *Legitimation Crisis*, 1976) プーランツァス(N. Poulantzas, *Political Pow-*

*er and Social Classes*, 1973) ミリバンド(R. Miliband, *The State in Capitalist Society*, 1969) オフエ(C. Offe, "Political Authority and Class Structure", in P. Conneton ed., *Critical Sociology*, 1976) オコナー(J. O'Conner, *The Fiscal Crisis of the State*, 1973) ルークス(S. Lukes, *Power: A Radical View*, 1974) マンデル(E. Mandel, *Late Capitalism*, 1974) ガフ(I. Gough, "State Expenditure in Advanced Capitalism", *New Left Review*, No. 92, 1975) のような原典に知的養分を見出し、なかんずくそれらは、国家論の最新の文献に、広く引用されるようになってい

る。この「ラディカルズ」の挑戦に対して、伝統的多元主義モデルは、いかにその優位性を示しうるのであろうか<sup>(4)</sup>。——リンドブロムの考察はさらに進行するが、われわれはここで、政治学の理論世界の「百花齊放」状態のもとで、「ヨーロッパ政治学の復権」が認められ、「国家論の復権」が共通テーマとなっており、筆者がかつて「西欧マルクス主義国家論ルネサンス」として整理した<sup>(5)</sup>ネオ・マルクス主義的潮流の理論が、政治学理論の支配的主流にとつても一つの脅威であり知的衝撃として受けとめられていることを、確認すれば足りる。そして、その一環と目された、ラルフ・ミリバンド(Ralph Miliband)の政治理論が、この小論での検討対象となる。

リンドブロムが注目し、アメリカの若き政治学徒たちに知的刺激を与えている「ヨーロッパ・ラディカルズ」の「国家論ルネサンス」の発端は、確かに一九六八年のN・プーランツァス『政治権力と社会階級』(田口富久治訳『資本主義国家の構造』I・II、未来社、一九七八・八一年)と六九年のR・ミリバンド『資本主義社会における国家』(田口富久治訳『現代資本主義国家論』未来社、一九七〇年)の刊行と、両者により『ニュー・レフト・レビュー』誌上で展開された論争であった。この限りでは、ミリバンドの名が「ラディカルズ」のリストに掲げられるのは当然であり、事実、七〇年代を通じてミリバンドの国家論は、「マルクス主義国家論ルネサンス」の一つの分派の代表であり続けた。しかし、今日の時点からふりかえってみると、ミリバンドのネオ・マルクス主義的諸潮流内部から得た評価

は、いくつかの分流のうちの一いま一つの分流の代表であった論敵ブーランツァスに比すれば消極的であり、西ドイツ「国家導出」学派などミリバンド・ブーランツァス論争から距離をおいた分流からはほとんど黙殺されたし、アメリカに生れたラディカル政治学者たちによっては、むしろ否定的にさえ扱われた。その「伝統的多元主義モデル」への対抗意識は、数あるネオ・マルクス主義的国家論の中でもひととき目立っており、その現代資本主義国家への階級的告発の姿勢と依拠する実証資料の手堅さについては多くの論者が認めているにもかかわらず、である。この、一見奇妙な「マルクス主義国家論ルネサンス」内部におけるミリバンドの位置と役割の問題を射程において、ミリバンドの「マルクス主義政治学」の問題性を剔出するのが、小論の直接の課題である。

2 ニュー・レフトとしての出発

ラルフ・ミリバンドの政治理論を検討するにあたって、われわれは主として、彼の著書『資本主義社会における国家』(一九六九年)と『マルクス主義と政治』(一九七七年)を用いる。著作としては他に、処女作『議会制的社会主義』(一九六一年)と最新作『イギリスにおける資本主義的民主主義』(一九八二年一月)があるが、前者はイギリス労働党史の手堅い実証研究ではあるが理論の要素に乏しく、後者については小論執筆時点で入手していないという単純な理由で、ここでの検討からは捨棄される。

ミリバンドの名が、わが国で多少とも知られるようになったのは、おそらく、一九六〇年初頭に創刊されたイギリス新左翼知識人の雑誌『ニュー・レフト・レビュー(NLR)』を通してであつたらう。丸山真男により、「旧来の左翼の型にはまった思考法からの大胆な脱却をめざすと同時に、他方では労働党のニュー・ルックのイデオロギーとし

て注目されているクロスランド[A. Crosland]やストレイチー[G. Strachey]の理論にも対決してゆこうとしている」と評された。この雑誌の創刊に、ミリバンドは編集委員として加わり、その創刊号には巻頭論文「労働者主義の病い」を寄せている。ミリバンドは、一九二四年生れ、ロンドン大学(LSE)でのハーロルド・J・ラスキ(H. J. Laske)の晩年の弟子の一人であり、このころLSEで政治学を講じていた。NLRの母胎となった二つの流れ——オクスフォードの『大学及び左翼評論(UJR)』と「スターリン批判」でイギリス共産党を離れた知識人たち中心の『ニュー・リースナー(NR)』——に即して言えば、親友J・サヴィル(G. Saville)らの属すNR系ということになるが、この巻頭論文に示された新左翼集団中でのミリバンドの役割は、同じNR系のE・P・トムソン(E. P. Thompson)らが後に論集『無関心からの脱出』(邦訳名『新しい左翼』)にまとめた伝統的左翼とそのマルクス主義理解からの「大胆な脱却」それ自体であるというよりも、むしろイギリス労働党の歴史に即してその業病ともいうべき改良主義と議会主義とを批判し、「労働党の原動力としての労働者主義はほとんど使い果たされた。しかし、社会主義のためのたたかいは、ようやくはじまつたばかりである」として、イギリス社会主義のための「討論と行動」の必要を説く、どちらかといえば「クロスランドやストレイチーの理論との対決」の方であつた。

翌六一年に刊行された彼の最初の著作『議会制的社会主義—労働政治における一研究』は、かつての師であり同僚であり友人であつた故ラスキへの謝辞を冒頭にかけていたが、そのラスキが「合意による革命」の担い手として晩年まで希望を託し党委員長までつとめその「社会主義化」のためにたたかつたイギリス労働党を、「議会主義に深くかぶれた党」としてその左派指導部をも含めて歴史実証的に批判したものであつた。イギリス共産党系の著名な歴史家、E・ホブズボーム(E. Hobsbawm)は、この書を、「労働党系社会主義者による、彼の党の永続的弱点について、明晰で辛辣に書かれた情熱的研究」と評したが、同時に、共産党も期待している労働党の左翼化の可能性につい

2 R・ミリバンド

ては読者に「マシニズムの印象」を与えかねない、と危惧した<sup>(10)</sup>。

そして、一九六四年に、ミリバンドは、長友サウイルと共に編者となり、「社会主義的分析・討論」のための年報誌『ザ・ソシアリスト・レジスター (SR)』を創刊する。「教条主義的反复は、もはや愚鈍な経済主義をこえる現金の過去の神話」を執筆して、先進資本主義諸国での百数十年の社会主義運動の歴史的経験を概括し、資本主義的秩序そのものの歴絶こそ社会主義であることを確認するとともに、サウイルとの共同論文「労働党の政策と労働党左翼」では、イギリスの現実に即して、イギリス共産党のような労働党外弱小組織でもかつての独立労働党や社会主義者連盟のような党内党でもなく、「選挙区組織活動家、労働組合活動家、左派議員から成る、限定された目的のための特定の争点に関して、労働党内左翼圧力団体の創出と増殖」(傍点、原文イタリック)を提唱する<sup>(11)</sup>。SR誌の創刊そのものは国内外から歓迎され、かつての社会改良のためのフェビアン協会に相当する社会主義的労働者教育機関創設の具体的提案も反響をよびおこしたが、この段階でのミリバンドの政治理論に関していえば、NLR誌上でSR創刊を論じたT・ウエンクラフ (T. Wengraf) が、I・ドイッチャー (I. Deutscher)、A・アブデル・マレク (A. Abdel Malek)、E・マンデルら国外寄稿者の論文に比してミリバンドの論稿は「イギリス左翼の相対的知的弱さ」を示している、と評した<sup>(12)</sup>ように、独自の理論的イムパクトに欠けるばかりか、マルクス主義理論との関わりも不明確であった。ミリバンドが、『資本主義社会における国家、西欧権力体系の一分析』(一九六九年)において、マルクス主義政治学者としての名を確立するにいたるまでには、右に略述したように、イギリス新左翼知識人運動の一員、独立社会主義者としての、現実政治への参加があった。それは、師ラスキの精神を引くイギリス社会の社会主義的変革への実践的関心に導かれた知的活動であると共に、ラスキとは異なる道で、共産主義運動とも一線を画しつつ、労働党の改良主

義と議会主義を超えた社会主義への接近を模索するものであった。その「討論」における戦線が、NLRとは別個に自ら創刊したSR誌の継続的刊行であり、「行動」における戦線が、夜間制「労働大学」構想から後のSR誌上での新党精成提案にいたる、イギリス社会主義の再生運動への参加であった。

いまひとつ、ミリバンドの政治理論を論ずるにあたって付記しておくべきは、アメリカのラディカル社会学者C・ライト・ミルズ (C. Wright Mills) との、短いが厚い交流のイムパクトについてであろう。名著『ホワイト・カラー』『パワー・エリート』などで知られるミルズは、一九五六年にはじめてアメリカ合衆国を離れ、ヨーロッパを訪れた。五七年四月にLSEの学生自治会に招かれたセミナーで、ミリバンドとミルズは知り合い、同年七月には、一緒にポーランドに旅行し、哲学者アダム・シャフ (A. Schaff) や若きL・コラクワスキ (L. Kolakowski) らと会談の機会を持つ。ミルズはNLR誌創刊を歓迎してアメリカから「ニュー・レフトへの手紙」を送りトムスンらとの討論を喚起したが、六二年のミルズの死に際しては、ミリバンドがNLR誌上に追悼文を発表してその短いが充実した生涯を悼んだ<sup>(13)</sup>。ミリバンドの『資本主義社会における国家』は、「C・ライト・ミルズの追憶のために」ささげられており、内容的にも『パワー・エリート』の国際版を企図した<sup>(14)</sup> (田口寛久治) と評されるゆえんである。

### 3 ミリバンドにおける「マルクス主義」解釈

ミリバンドの政治理論を探る起点としてここでとりあげるのは、六五年のSR誌に掲載された論文「マルクスと国家」および、アメリカの独立社会主義者の雑誌『マンスリー・レヴェル』レーニン生誕百年記念号(七〇年四月)に寄稿された「レーニンの『国家と革命』」である。この両者によって、彼のマルクス主義理解、あるいは共産主義運

動の理論的基礎とされてきた公式的「マルクス・レーニン主義」への彼の距離を、そして、彼の政治理論の原型を、測ることが可能となる。

「マルクスと国家」において、ミリバンドは、従来の「マルクス・レーニン主義国家論」を、①マルクス(K. M. Marx)の複雑な国家観を一面的に単純化している。②マルクス自身の見解とエンゲルス(F. Engels)やレーニン(W. I. Lenin)によるその解説・解釈を区別して扱っていない、と批判する。ミリバンドによれば、マルクス自身は国家の包括的・体系的理論を残そうとはしなかったのであり、さまざまなテキストを歴史的・同時代的現実との関わりで解説することが必要である。初期のヘーゲル法哲学批判における「国家と市民社会の『矛盾』」や「政治的解放から人間の解放へ」の視角は、私的所有と階級支配を関連づけて、『共産党宣言』の「近代国家の執行部は、全ブルジョアジエの共通業務をつかさどる委員会にはかならない」という有名な言明に結びついた。「マルクス・レーニン主義」の公式理論は、ここから「支配階級の道具」としての国家観を抽出しこれのみを教条化するのであるが、マルクス自身にとっては、したがってまたミリバンドにとっても、これは、「第一義的國家観」であるにすぎない。マルクスには、国家についての別の考察も存在するのであり、それは、「すべての社会諸階級から自立しそれらの上位に立つ国家、支配階級の道具というよりもむしろ社会における支配的勢力となる国家」という「第二義的國家観」である。この「第二義的國家観」は、国家を動かすものは、必ずしも「支配階級全体ではなくその分派」であったり、「経済的に支配的な階級ではない階級に属して」いたりするという「自立性」に示唆されているが、その極端な表現は、エンゲルスがこれを「両階級から自立」した「階級均衡」権力とみたのは言い過ぎであり、「マルクスにとって、ボナパルト国家とは、いかなる所与の階級からも政治的に自立していたにもかかわらず、経済的・社会的に支配的な階級の

防禦者に留まり、また階級社会では留まる以外にはない」階級国家であった、とする。この視角は、ミリバンドにおいて、「経済エリート」と「政治エリート」との種差性・相互連関の問題として、『資本主義社会における国家』に援用される。また、「社会における支配的勢力としての国家」とは、マルクスのアジア的生産様式論・東洋的専制論から抽出されるもので、「その全構成員から自立し上位に立ち、その行政部を支配する人々が、社会の真の支配者である」ような国家であり、ミリバンドによれば、この国家観は、マルクスの「資本主義後の社会における政治権力、とりわけ彼のプロレタリアート独裁観」に通じるものだという。すなわち、マルクスの「プロレタリアート独裁」概念は、しばしば権威主義的・国家主義的なものと誤解されているが、それは、「ブルジョア社会における最も発達した政治レジームの型」としての「民主共和性」と対置される、政治支配の一形態であり、「政治権力の階級的性格の言明であるとともに、政治権力それ自身の記述」をも含んでいる。そして、「フランスにおける内乱」草稿の「パリ・コミューン」を「国家それ自身に対する革命」とみる視角、『ゴータ綱領批判』の「自由とは、国家を社会の上に立つ機関から完全に社会に隷属する機関に転換することにある」とする言明にみられるように、「プロレタリアート独裁」は、「民主共和制」より「より自由」で、「抑圧の側面より解放の側面を強調」する「反権威主義的・反官僚主義的」な概念であり、「民衆の参加と民衆の支配」を要求する形態である。こうしたマルクスの「プロレタリアート独裁」理解からすると、エンゲルスが、ナショナルなレベルでの革命を伴わないパリ・コミューンを「プロレタリアート独裁」と同一視したのは問題があるし、「民主共和制」を「プロレタリアート独裁の特有の形態でさえある」としたのは誤りである、と。

R・ミリバンド

右の「プロレタリアート独裁」観は、わが国でもしばしばみられるこの概念を過渡期国家の本質規定とみなしその形態性を捨象する解釈とは正反対のものであるが、この問題を、やや異なる角度から論じたのが、ミリバンド「レ

ニの『国家と革命』である。『資本主義社会における国家』刊行後の論文であるが、あわせてみておこう。レーニン『国家と革命』は、マルクス主義思想の中で「神聖な教科書」として扱われてきたが、ミリバンドはこれを「社会主義権力の行使」についての「未完の書」として批判的に言及する。レーニンにおいて、プロレタリア革命は、「ブルジョア国家の粉碎」を基軸とするが、同時にそれは「国家の死滅」の開始であるばかりか「すでに分解の進んだ段階」にあるものとして扱われる。革命により生れる「プロレタリアート独裁」は、「武装された労働者たち」による「非媒介的階級支配」であり、旧国家権力の常備軍は廃止され、官僚制はこの「武装された労働者」に完全に従属するものとされている。しかし、この「武装された労働者の国家」の構造的側面は、「労働者兵士代表ソヴェト」についてのごく簡単な言及以外には、ほとんどふれられていない。ミリバンドはそこで、言及されていない重要問題としての「革命権力の政治的媒介の問題」を挙げる。その中心は「党」の問題であり、『国家と革命』では、三箇所で付随的に触れられるのみで、レーニンは、階級としてのプロレタリアートとその党との関係を未解決のままに残しており、さらに「党のリーダーシップ」の問題に生まれる「独裁」への力学を、否定してしまっただけで、「プロレタリアート独裁」に内在するこうした問題を、「一九一七年以降のロシアの特殊な環境——後進性、内戦、外国干渉、荒廃、大衆的収奪、民衆の不满、革命のよびかけにこたえた他の諸国での失敗」に帰することはできない。なぜならば「社会がどのように構成されているにしても、不可分で単一の人民の意志などありえない」のであり「政治的媒介」の問題が必ず生起する。「単一政党支配を定義上排除する代替的な表現と政治的表出の経路が、適切に準備されていない限り、社会主義的民主主義についてのいかなるおしゃべりも、はったりと認めてよい」とミリバンドは断言する。こうした観点からすると、レーニンは、『国家と革命』において、「国家の死滅」の程度を過大評価していた。革命後にレーニンが直面した国家はなお「ブルジョア国家」「本来の国家」であったのであり、「民主共和制」と区別される

「政治形態」としての「プロレタリアート独裁」は、マルクスからレーニンが正当にも引き出した「すべての人々が順番に統治しやがて誰もが統治しないことになれるようになる」未来像と結びつかなければならない。——

以上のミリバンドのマルクス論、レーニン論は、「現存する社会主義」諸国や共産主義運動内に根強く残る「マルクス・レーニン主義」的國家論・社会主義論に対する批判としては、ある程度の説得力をもっている。しかし同時に、その批判の方法自体のなかに、いくつかの問題が潜んでいることも否めない。この点を検討してみよう。

第一に、ミリバンドのマルクス國家論の整理は、「マルクス・レーニン主義國家論」の「支配階級の道具」説を「第一義的國家観」と認めたとうえで、「第二義的國家観」にみられる「相対的自立性」を復権しようとするものである。その整理の仕方は、マルクスの社会理論全体の構造の中において国家を位置づけるというのではなく、主としてマルクスの政治論文の中から、伝統的公式的理論が無視ないし軽視してきた言明を引いてきて再解釈するものである。したがって、『資本論』や『経済学批判要綱』などマルクスの社会理論全体に関わるレベルでの国家の理論的問題——例えば、「国家と市民社会の分離」と現代「介入主義国家」との関係——は、ミリバンドにおける「再検討」にあつては、一応除外される。また、マルクスとエンゲルス、レーニンとの区別は有益であるが、マルクス自身に対するミリバンドの態度は、「マルクス・レーニン主義者」とは異なる形ではあつても文献解釈学の枠内のものであり、今日的・批判的視角は、明示的には内蔵されていない。

第二に、マルクスの「プロレタリアート独裁」概念の再検討も、したがって、文献解釈学の範囲内で、そのすぐれて解放的な「形態」的特質をすくいあげようというものであるが、すべての文献をあたりつくしたたものでもないし、その理論的含意——例えば「プロレタリアート独裁」と「社会主義」「共産主義」の歴史段階的關係——も必ずしも明確ではない。「民主共和制」と「プロレタリアート独裁」の形態的断絶を主張しながら、その未来形態の萌芽をバ

リ・コミュニケーションに求め、しかもコミュニケーションは「プロレタリアート独裁」ではない、とするような論法は、エンゲルス批判にはなりうるにしても、論理的には不明瞭なままであるし、マルクスの「解放的」「民主的」思想の強調にはなっていないが、「プロレタリアート独裁」概念をいつそう神聖化する方向へと作用しており、例えば「プロレタリアート」概念や「独裁」概念を分析的に再検討するような視角からは、かけはなれている。端的に言えば、「護教的」とはいわぬまでも、「防禦的」である。

第三に、レーニンに対する態度は、「スターリン体制」と「現存する社会主義」の歴史の実態をくぐったうえでの反省的評価として注目するに値するが、にもかかわらずやはり「防禦的」印象は否めない。一見、「プロレタリアート独裁」に内在する「政治的媒介」問題の重要性を強調する解釈とも読めるが、それもほとんど「党」の問題に集中しており、たとえば労働組合の役割、経営内部の管理システム（分業システム）、情報流通メカニズムなどの政治的含意にまで及んでおらず、レーニン晩年の「苦悩」や『国家と革命』中の「理想」を汲みあげるのみで、『国家と革命』全体、あるいはレーニンの政治理論全体の歴史的评价は、曖昧なままに留まっている。チェコスロヴァキア「プラハの春」（一九六八年）をめぐり、七〇年代に「百花齊放」となる「現存する社会主義」批判の大きな流れのなかで、ミリバンドのこのレーニン論は、「神聖な教科書」へのおすおすした部分的批判以上の印象を与えるものではなかった。

#### 4 「相対的自律性」の国家論と政治学

ミリバンドの『資本主義社会における国家』は、その「序論」で「本書の主要な目的の一つは……先進資本主義諸

国に関する社会・政治・国家についての多元主義的・民主主義的見解が、そのすべての本質において間違っていること——この見解が現実への手引きになるところか、とほうもなく現実への知覚を失わせるものであることを、詳細に示すことにある」と述べている。一九六九年という歴史的時点で、「政治分析の焦点としての国家」の復権を企図し、マルクス主義的伝統の乏しい欧米政治学・政治社会学の理論世界で「マルクス主義的政治分析」を多元主義理論に對置して再興しようと試みたことは、たしかにミリバンドの先見であったし、重要な貢献であった。そのために準備されたアメリカ、イギリス、フランス、ドイツなどの「経験的証拠」も、『議會制的社会主義』の著者にふさわしく、手堅く膨大なものであった。しかし、そこで採られた方法は、前述したマルクス論・レーニン論にみられた視角を現実政治分析のレベルで「適用」することであり、したがってまたその問題点を再生産する、「防禦的」なものであった。

全九章からなるこの書物は、「先進資本主義社会」の「国家体系」と「政治体系」の分析にあてられる。「国家体系」とは、「国家」を構成するさまざまな「機構」のシステムであり、「政府、行政部、軍部及び警察、司法部、地方政府、議会的會議体」を含む。そして、これらの機構を通して「国家権力」を行使する人々——「大統領、首相及び大臣、高級公務員その他の国家行政官、トップの軍人、上級裁判所判事、少なくとも議会の指導者メンバーの若干」が、「国家エリート」と名づけられる。「政治体系」とは、国家がその政治支配への支持ないし黙従を調達し、現存秩序を「正統化」していく市民社会のネットワークであり、政党、圧力団体、企業、教会、マス・メディア、教育制度、その他から成る。「国家体系」と「政治体系」との主要な媒体は、政党と圧力団体であるが、A・グラムシ（A. Gramsci）の「市民社会」概念にならって、教会、マス・メディア、学校、さらには企業等をも「政治的社会化」の重要な媒体とした点が、当時のマルクス主義的国家分析の枠組としては、目新しいものであった。イース

トンの・アーモンド (G. A. Almond) 的な「政治体系」への直接的・形式的対峙は、この枠組自体にもひとまずあらわれる。

しかし、ミリバンドのマルクス主義者たる存在証明は、「国家体系」「政治体系」の分析の前に、「経済エリートと支配階級」の章を設け、生産手段所有の不平等にもとづく経済的支配階級の存在と巨大企業の主導的役割を確認し、「所有と経営の分離」にもかかわらず経営管理者が資本所有に規定され「経済エリート」が資本家階級内で再生産されていることを論証し、この「支配階級」「経済エリート」との関わりで——より正確には、関わりでのみ——「国家体系」と「政治体系」を分析していることである。この視角は、彼のマルクス論における、「国家の相対的自律性」という「第二義的国家観」の抽出により可能とされたもので、「マルクス・レーニン主義」的系譜の、「経済的支配階級」と「政治的支配階級」を区別しない議論に比すれば、精緻化されている。同時に、マルクスの「第一義的国家観」は、「支配階級の道具」であるとすでに確認されているのであるから、ミリバンドの具体的分析は、「経済エリート」と「政治エリート」を種差的に論じたうえで、にもかかわらず、「国家体系」においても「政治体系」においても「経済的支配階級」が支配していることを論証、することにあてられ、そのために、「企業」の役割がいたるところで強調されるように構成されている。しかも、その論証の方法は、「国家エリート」たちが、「社会的出自、教育、階級状況」からして、「経済的支配階級」から供給され再生産されるという人的結合の経験的事実に依るもので、実業家たちの「利益」と「国家体系」の作動目的、結果の合致を主張し、多元主義論者のいう「競争」に「不完全競争」の歴史的経験を対置するものであった。<sup>(18)</sup> 後に、プーランツァスをはじめとする多くの論者たちにより、ミリバンドの国家論は伝統的な「国家の道具主義理論」の枠内にあるもの、と分類され、多元主義者に対する「経験主義的論駁」に留まり理論的ではない、と批判されたゆえんである。

いわゆるミリバンド・プーランツァス論争は、『資本主義社会における国家』に対するプーランツァスのNLR誌上での書評(一九六九年末)により始まるのであるが、ここでのミリバンドへの批判が、プーランツァス『政治権力と社会階級』(一九六八年)というマルクス主義国家論の従来とは異なる斬新な展開に裏打ちされていただけに、対立点は鮮明であり、またミリバンドの反論は「防禦的」たらしざるをえなかった。しかし、これについては、田口富久治氏による詳細な紹介とコメントがあり、筆者自身も「マルクス主義国家論ルネサンス」の中に位置づけてたびたび論及してきたので、ここでは立ち入らない。ここではむしろ、この論争と、それを端緒として国際的・学際的に展開された「国家論ルネサンス」の総過程から、ミリバンド自身は一体なにを学んでいったのかを、七七年刊の『マルクス主義と政治』から、解説し検討してみよう。

この著作について、ミリバンドは、「私がマルクス主義政治学の主要なテーマと問題と考えているもの」を、「マルクス、エンゲルス、レーニンの著作から主として得られた素材の『理論化』によって」示そうとした、と声明する(序言)。前者に対する「経験主義」「理論の欠如」といった批判への反論の企図を読みとることも可能であろう。ここでの「マルクス主義」とは、「スターリン主義のマルクス主義に対する支配の経験」をくぐった今日においては、「『公認』マルクス主義の正統的教義」などは存在しえず、「個人の判断と評価のみ」により解釈されるものである(pp. 5, 邦訳、八一—二頁)。そして、「マルクス主義政治学」に関しては、その革命運動・労働運動との実践政治的関わり、マルクス主義者たちの政治論文の歴史的情境的性格と非体系性・断片性を前提として、「マルクス自身とエンゲルスに原典としての第一義性が与えられなければならない」。これを「本質的出发点」「唯一可能な『基礎』」として、レーニン、R・ルクセンブルク(R. Luxemburg)、グラムシなども有効に利用しうるが、「その原典は、相異なる矛盾した解釈を受けやすいばかりでなく、実際に、緊張、矛盾、未解決の問題をかかえており、それがマル



クス主義政治思想の本質的部分を形成している」(p.55, 邦訳、二頁)。

この「マルクス主義政治学とは何か」という問題設定自身の中に、ミリバンドに特有な、一つの思考パターンを見出すことができる。すなわち、「マルクス主義政治理論」において、「第一義的なもの」「基本的出発点」は、マルクス自身の政治についての言及以外にはありえない。しかしそれは、エンゲルス、レーニン、ルクセンブルク、グラムシら、さらには労働運動や社会主義運動の歴史的経験など「第二義的なもの」により媒介しなければならない。同時にこの「第二義的なもの」による媒介は、あくまで「第一義的なもの」の真髄——とミリバンドが考えるもの——を現代において蘇生させ豊富化させるものでなければならない、とミリバンドの思考は解読しうる。この思考は、かつて、マルクスの「第一義的国家観」を確認したうえで、「第二義的国家観」としての「相対的自律性」をも抽出し、「第一義的国家観」そのものを補強しようとした、彼の「マルクスと国家」のあの発想と似ている。また、マルクスの「プロレタリアート独裁」概念をマルクスの思想的核としてオリジナルな解釈により抽出し、エンゲルスの、レーニンのバイアスには欠けていた「形態性」「政治的媒介」「党の問題」の重要性を強調し、そのうえでマルクスの概念を現代の未来像として再措定し復権しようとした、あの思考過程と相通している。一種の「マルクスに帰れ」の主張であり、「媒介的還元主義」とでも名づけるべき、ミリバンドのこの思考パターンは、実は、「マルクス主義政治学の理論化」を志したこの書物のなかで、くり返しあらわれる。以下、そのいくつかを例証してみよう。

まず、「マルクス主義を、政治からいかなる実質的な程度での自律性をも奪う『経済決定論』に変えてしまう」傾向があった、とミリバンドも認める、いわゆる「土台-上部構造」論について。ミリバンドは、マルクス『経済学批判』序言の「史的唯物論の公式」や『資本論』第三巻の国家についての言及(「不私剰余労働が直接生産者から汲み出される独自の経済的形態は、支配-従属関係を規定する。……」)は、「決定」のいかなる硬直した機械論的

概念をもはつきりと拒絶している」と解釈し、次のように自己の判断を示す。

マルクス主義者はふつう、この「[経済的土台]の」「第一義性」を、エンゲルスに従って、「[経済的土台]が、[最終審級]において」決定的あるいは規定的である、という意味に理解している。しかし、「[経済的土台]は、出発点として、第一審級の問題として扱った方が、はるかに適切であり有意義である」(p.56, 邦訳、一六頁)。

いうまでもなくこれは、ブーランツァス(やアルチエセルら)の「[最終審級における経済の決定]」論(「構造主義的マルクス解釈」へのミリバンドの反論・批判であり、政治形態や政治過程の「自律性」を救いあげる解釈である。と同時に、この「第一義性」「第一審級」が分析の「手引き」であり、「マルクス主義者が全く正当にも経済的『土台』と生産様式に力点を置いてきた」ことが強調されるのである。

ミリバンドの、「階級闘争」の扱いにも、同様のパターンがみられる。彼は、この「階級闘争」概念こそ、「マルクス主義政治学の核心」「本質的で第一義的な焦点」である、と解する。しかしながら、マルクスが『共産党宣言』で述べた定式(「階級対立の単純化」……)は、「[資本・賃労働]」二階級間対立が階級社会における唯一の敵対関係であるという意味にとつてはならない。彼ら「マルクスとエンゲルス」は、階級闘争の他の諸形態の存在を認めていたし、……階級闘争以外の諸闘争の存在をも認めていた。真に重要な点は、資本主義社会における第一義的闘争が、資本家と賃労働者との闘争であることである」(p.58, 邦訳、三三頁)。

R・ミリバンド

「労働者階級」概念についても、同様である。「労働者階級の『客観的』決定」は、マルクスの「生産的労働者」概念に従い、「剰余価値を産み出す」ことであるが、これは何を生産するかに特定されず、「従属的機能」を果たすことで足りる。したがって、ミリバンドによれば、マルクスの「労働者階級」概念とは、「従属的立場から、剰余価値を生産する『集団的労働者』の一部であり、所得階梯の低い方の端にあり、かつまた、社会的威信階梯とよぶべきも

の低い方の端にある」存在として理解される。しかし、この階級の内部には「不均質性」があり「多くの相異なる階層へと分割されている」ことを承認する。また、「産業資金労働者・工場労働者」が「近代プロレタリアート」として「労働者階級の中核」であるが、「さまざまな技術的・知的・監督的・管理的職務を果たす『労働者』」の存在は否定されず、「どこで線を引くか」が重要な政治的含意をもつことも強調されている(92頁 邦訳、三六頁以下)。いうまでもなく、これは、「ホワイト・カラー」や「サーヴィス労働者」の存在をもってマルクスの「プロレタリアート」概念を否定するような傾向への批判であるとともに、「マルクス・レーニン主義」的系譜にしばしばあらわれる「肉体労働者主義」への批判でもあり、より直接的には、プーランツァスの「ホワイト・カラー」新しい小ブルジョアジ

そして、こうした思考パターンにもとづいて、ミリバンドは、「マルクスと国家」でも『資本主義社会における国家』でもすでに内包されているが明示的には述べられていなかった、「国家の相対的自律性」についての自己の考えを、ここにはじめて「理論化」して示す。そのさいも、「マルクス主義政治理論・国家論の出発点は、『社会全体』の受託者、道具、代理人といった「ブルジョア理論」の国家観を断固として排撃し、「支配階級」による「階級支配の不可欠の手段」としてのマルクスの国家観を擁護することにあることが、「第一義性」をもつ。

国家は、マルクス主義的には、「支配階級」に代わって行動するけれども、たいていの場合、その命令により行動するのではない。国家は、まさに階級国家であり、「支配階級」の国家である。しかしそれは、階級国家としてのその作動の仕方において高度の自律性と自立性をもっており、もしそれが階級国家として行動すべきだとすれば、この高度の自律性と自立性を、実はもたなければならないのである。「道具」としての国家の観念は、この事実に合致せず、国家の決定的特性とみなされるようになったもの、すなわち「支配階級」と広くは

市民社会からのその相対的自律性を、あいまいにしがちである(93頁 邦訳、一二頁)。

相異なる国家形態は、相異なる程度の自律性をもっている。しかし、すべての国家は、支配階級階級を含むすべての階級から、一定の自律性あるいは自立性(これらの術語は、ここでは互換的に用いられる)をもっている。……マルクスとエンゲルスは、国家の相対的自律性を認める場合には、しばしばその自律性の範囲を誇張して認めがちであった。これとは反対に、後のマルクス主義者たちは、つねに国家の相対的自律性を過小評価する強い傾向をもっていた(98頁 邦訳、二二五―二六頁)。

市民社会から分離した実在としての国家というこの観念そのものが、まさに両者の間の一定の距離、すなわち乖離という意味での一つの関係を、含意している。この乖離は……国家そのものの消滅のみにより終焉しうるが、国家の消滅はまた、階級分裂と階級闘争の消滅、そしておそらくは多くのその他のことからも依存するのである(99頁 邦訳、二二六頁)。

以上の言明は、プーランツァスらの構造的重層的決定論とも、イギリス・マルクス主義の一部に現われた「真の自律性」論(R. Hirst, B. Hindessら)とも区別される、ミリバンドなりの「相対的自律性」論である。また、それまで幾人かの論者により、ミリバンドの国家論が「道具説」内に分類されてきたことに対する、反論でもある。しかし、こうした「自律性」の主張自体が、ミリバンドにおいては「国家の階級性」を弱めるものではなく、むしろ先の「第一義性」を強調するものである。次の言明を見よ。

国家の相対的自立性は、その階級の性格を減ずるものではない。反対に、その相対的自立性は、国家が思いのまま柔軟な仕方ですその階級の役割を演じることを可能にする。もしも国家が実際に「支配階級」のたんなる「道具」にすぎないとすれば、その役割を達成することは致命的に妨げられるであろう。その代理人たちは、現存社

会秩序にどのようにして最もよく奉仕しうるかを決定するさいに、ある程度の自由を絶対的に必要とする(98, 邦訳、二三頁)。

ミリバンドは、ここから、「改良」が資本主義的秩序維持の重要な手段であり支配階級の「マス・ウオーの場」であることを論証していく。

## 5 「媒介的還元主義」とその限界

右のようなミリバンドの「国家の相対的自律性」論には、いくつかの理論的問題が孕まれている。第一に、この「相対的自律性」が、何の何からの「自律(自立)」であるかが不明瞭なきらいがある。多くは、「支配階級」からの「国家」の「自律性」、ないし「階級権力」からの「国家権力」の「自律性」であるが、「市民社会」一般からないし「全階級」からの「自律性」を語る場合もあり、それらの間の関係が、理論的に充分整理され説明されていない。第二に、この「相対的自律性」は、「支配階級」の「利益」と「命令」とのあいだ、「支配階級」と「その代理人」とのあいだの関係として具体化されているから、それは実は「自律性」を述べているというよりもむしろ「相対的」の方に力点がおかれている。いかえれば、ミリバンドにおける「国家の相対的自律性」とは、「階級支配の手段」としての国家の「第一義性」を論証するさいの「媒介」なのであり、「道具」を、「手段」と言い換えたにしても、プーランツァス以降の「国家論ルネサンス」で展開された「国家Ⅱ関係説」的視角との対比でいえば、明らかに「国家Ⅱ道具説」の枠内に入らざるをえない。

第三に、したがって、ミリバンドの「相対的自律性」は、「階級闘争」との関わりでいうと、もっぱら「資本家階

級による労働者階級の搾取・抑圧」の側面にのみ関わり、晩年のプーランツァスが認めたような、「被抑圧階級の階級闘争」の側からの国家諸装置内部への「対抗」諸力の凝集は、射程に入らない。また、「国家と市民社会の分離」国家諸装置が「一枚岩」ではなく「国家体系」を成すこと、資本・賃労働以外の「階級対立」の存在、「階級闘争」以外の諸闘争(最近の「ネオ・グラムシ派」H. Laclau, C. Mouffe, B. Jessopらの用語でいえば、「人民・民主主義闘争」)が存在すること、等が「媒介的」に認められていながら、これらはそれぞれの独自の含意と価値が必ずしも認められているわけではなく、かといって「階級闘争」概念に収斂されているわけでもなく、もっぱら「資本による階級支配」の媒介的あり方、一種の「マス・ウオーの領域」として理解されているかにみえる。これでは反核運動などは、理論的射程に入らない。先に、「媒介的還元主義」と名づけたゆえんである。

この「媒介的還元主義」は、ミリバンドの政治理論構成において、ほとんど体質ともよぶべきものとなっている。すなわち、彼の思考において、「第一義性」をもつものは、常に、マルクスの政治と国家についての何らかの言明であり、彼によるその解釈である。彼はしかし、その言明・解釈とは異なる言明・解釈、時にはそれに反する事実の存在をも認める。これは、「マルクス・レーニン主義」の「公式教義」「神聖な教科書」とは異なるところである。そのうえで、「第一義的」言明・解釈と異なる「第二義的」言明・解釈、事実上、「第一義的」言明・解釈「出发点」をより豊かに説明する材料として秩序だてられ、その含意と役割は、「第一義的」言明をむしろ補強するものに転換される。しかし、こうした思考は、果たして「マルクスの」なのであろうか？ また、「マルクス主義政治学(再)構築」にとっていかなる意味をもつのであろうか？

第一に、ミリバンドの「第一義的なもの」は、マルクスの言説の表層から採られたものがほとんどで、それとは異なる言明・解釈の余地が多くは認められているから、その「第一義性」とは、そもそもミリバンドの主観の内部に

のみ存在するものとなる可能性を排除しえず、常に、不安定である。いかえれば、他の言明・解釈が「第一義性」「第二義的」であった言明が「第一義的なもの」とされ、そこにかつての「第一義的なもの」も包摂される（かつては不可避的に潜在している。特に、ミリバンドの場合（あるいはまた「マルクス主義政治学」と称する他の多くの研究の場合）、マルクスの『資本論』や政治経済学批判体系から出発するのではなく、理論体系上の位置が不明瞭な「政治論文」や個々の言明から出発する機会が多いのであるから、この不安定性・不確定性は、いっそう増幅される。これを避けるためには、マルクスの愛した評言「すべては疑いうる」に忠実に、マルクスの個々の言明をも金科玉条とすることなく、われわれが当面している現実との緊張のなかで、マルクスのように思考する（マルクスが生きていたならば思考したであろうように思考する）ことが必要であるのだが、ミリバンドにおいては、そうした問題意識は稀薄で、マルクスの言明も有効性を失うし、その新たな結論が自己の考える「マルクス主義政治学」の体系に入る余地がないのであれば、その体系自体を疑い再構成する以外にはないであろう。たとえば、マルクスの時代に日常用語として学「たりえない」とすることは、マルクスの思想なり精神なりに沿ったものであろうか？あるいは、「プロレタリアート独裁」のマルクスの概念がいかにエンゲルスやレーニンのそれとは違つて「解放的」であるにしても、そのことは今日の「国家介入主義」の全面化の地点からよりかえつて、はたして「産業資本主義」段階の国家は「ブルジョア民主主義」的な介入なき国家であつただらうか、と。

第二に、ミリバンドのいう「第二義的なもの」あるいは「媒介」は、なにゆえに「第一義的なもの」を補強する役割においてのみ位置づけられなければならないのであろうか？ミリバンドにおいて、この「第二義的なもの」も、もっぱらマルクスの直接的言明の範囲内で扱われる傾向がある。たとえば、ミリバンドもその存在を認める非階級的対立・闘争をみてみよう。男女平等、婦人解放やナショナリズム、民族的なものは、「第二義的なもの」の範疇に入るであろう。しかし、ミリバンドの理論の中で、婦人解放の問題は、ほとんど扱われない。したがつて、その存在は認められていても、「階級闘争」の重さの前には独自の身の置き場はなく、現実政治において独自の意味をもつものとしては扱われない。『資本主義社会における国家』において、「二〇世紀の一切の世俗的宗教の中で最強のもの」とされたナショナリズムは、時に政治的・社会的秩序にとって「逆機能的」になることも認められている。しかしミリバンドにより興味をもたれるのは、「保守主義イデオロギイの非常に重要な一部」としてのその役割のみである。ナショナリズムは、『マルクス主義と政治』において論じられる「伝統」の一部を成していると考えてよいであろう。ここでも、「体制信従的伝統」と「異端の伝統」が区別され、「もろもろの伝統諸様式が、画一的に保守的であるわけではない」と認められながら、マルクスに従つて、「既成の秩序を正当化する方法」の範囲内でのみ扱われる。より具体的には、ミリバンドのいう国家の四つの機能——(a)「法と秩序の維持」の「抑圧的機能」、(b)「同意の培養」の「イデオロギイ的文化的機能」、(c)「広義の経済的機能」、(d)「国益増進の「国際的機能」——のうち、第四の「国際的機能」との関わりで論じられ、「ナショナリズムは、初期のマルクス主義者たちが考えたよりもはるかに持続的であり、したがつてはるかに対応困難な問題であることが明らかになった」ことは認められているが、それも「国家制への志向」の範囲内でのことである。いまひとつ示せば、せつかく資本主義社会の「スポーツ文化」の重要性に着目しながら、それは「商業主義と金銭的価値の浸透」という意味以上には論点を拡大しない。つまり、私的所

有と階級対立の視角のみでは処理しきれぬ階級対立（政治の要因）の存在を認めながらも、それら「第二義的なもの」を階級対立・階級闘争との関わりの範囲内でのみ論じそこでの従属的役割に還元していくところに、ミリバンドの「マルクス主義政治学」の特徴をみる事ができる。しかし、最近のネオ・マルクス主義国家論では、これら非階級のカテゴリーの独自の政治的存在と意義を認め、これらを階級カテゴリーに従属させるのではなく、むしろ論理のそれぞれのレベルにおいて「接合」する方法が開拓されてきている。ミリバンドは、この点でも、むしろ伝統的理論枠組内の修正派としてあらわれる。

第三に、したがって、ミリバンドにおける「マルクス主義政治学」の全体は、「マルクス・レーニン主義」が扱ってきた「国家と階級闘争の理論」と対象領域を同じくし、ただその説明において、それを「プロレタリア党の戦略と戦術」に解消することなく、より媒介的な諸範疇を導入しようとする試みのものであると考えられる。ミリバンドはたしかに、『マルクス主義と政治』において、マルクス主義政治学が従来ほとんど対象化しえなかった領域として「一九一七年以来の共産主義者の経験と共産主義国家・政治体系の性格と作動」の問題を挙げ、これを分析している。「現存する社会主義」のもとでの「政治」を分析しなければならない、というこのミリバンドの提言は、それ自体はきわめて正当なものであった。しかし、その分析の方法と結論については、やはりまたしても「媒介的還元主義」の問題を孕んでいると言わざるをえない。この点は、やや詳しくみておこう。

いわゆる「現存する社会主義」について、ミリバンドは、『資本主義社会における国家』でも『マルクス主義と政治』でも、これを「集産主義」社会として特徴づける。その含意は必ずしも明瞭ではないが、生産手段の私的所有が廃絶され生産の社会化が資本主義への回帰不可能なまでにすすんでおり、しかし彼のかの「プロレタリアート独裁」概念に照応する政治的レベルでの人民権力（民衆の参加と民衆の支配）の創出に至っていない点で社会主義ともい

えない、ということであろう。この社会の国家を、彼は、「少なくともその国家が支配する市民社会からの、非常に高度な自律性」「執行権力の極度の肥大化」として特徴づける（この点は、「第三世界」の国家と共通する）。「第三世界」の国家は、「経済権力の道具であると共に源泉であり、主要な『生産手段』である」が、その活動の「自律性」は「資本主義企業の可能性」により決定される。これに対して、「集産主義」社会の国家は、「資本主義企業の可能性の欠如」により「権造的制約」を受け、ここに「第一義的制約」がある。たしかにこの社会には「パー・エリート」「権力保持者」が存在するが、「経済的に支配的な資本家階級の欠如、資本主義的富裕化機会の欠如」のもとで「国家は単一の階級や集団を『代表』するのではなく……、集産主義的社会または制度それ自体を『代表』している」。したがって、問題は、「国家ブルジョアジー」「新しい階級」論や公認教義の「全人民国家」論のような問題設定に立つのではなく、この「第一義的制約」内部での「代表」のあり方、すなわち国家権力を共産党が独占し、党が国家の指導者がしばしば「無制限の自律性」を享受していることを理論的に説明することである。そこでミリバンドは、マルクス、エンゲルス、レーニンにさかのぼり「階級と党」の問題を考察し、マルクスにおいては「労働者階級それ自身の努力による解放（自己解放）」が主たる関心であり「党は階級のたんなる政治的表現であり道具であるにすぎなかったこと、レーニンがこの「自己解放」過程での「組織と指導の必要」から「党」を強調したこと、しかしこの両者は共に必要であり「代表性の要求」と「効率性の要求」は矛盾しうること、「革命は、『代行主義』の一定の要素を随伴せざるをえないばかりでなく、実際にはそれを必要とする」こと、等々を説く。この文脈でのミリバンドによる「スターリン主義」の解剖（①個人の絶対的権力、②弾圧の絶対的規模、③人民の恭順、④世界の共産党への拡大、⑤「党」の神格化、⑥党崇拜）はそれなりに興味深いものであるが、彼にとって理論的・実践的に重要なのは、「階級と党との緊張関係」の自覚であり、その「緊張緩和の度合」である。そして「緊張緩和」を保証するもの

2 R・ミリバンド

は、究極的にはマルクスの「プロレタリアート独裁」概念に含意された「人民権力」の具体化である。<sup>(20)</sup>

以上のミリバンドの所説は、「現存する社会主義」のマルクス主義的批判的分析として、ある程度の有効性をもっている。それはとりわけ、「階級と党」の矛盾を「代表性と効率性」「民主主義の要請と指導の要請」として把握分析する局面について、あてはまる。しかし、「集産主義国家」の分析は、必ずしも成功しているとはいえない。なぜならば、この社会での「パワー・エリート」の存在を認めながら、これを社会構造＝「資本主義化の不可能性」によって「党の代表性」の問題に還元し、そこでの「緊張の程度」のレベルで片づけるのは、「現存する社会主義」の強大な国家権力の批判の対象化として、あまりにも単純にすぎると思われるからである。第一に、「集産主義的経済構性」を許すというのでは、その「第一義性」「制約」の意味がそもそも問われることになる。むしろ、彼のいう「集産主義」社会に固有な諸矛盾を、国家―産業―企業の間や企業内における管理―被管理の諸関係の問題として抽出し、そこから生成する「政治」（筆者はこれを「分業的・階層的政治」と名づけた<sup>(21)</sup>）を、それ自体として分析する方が、すでに半世紀以上にわたる「集産主義国家」の存在とその強大化の説明としては有効であると思われる。第二に、ミリバンドが「高氏の自律性」の環として抽出した「代表性と指導性」の問題も、それが「階級と党」というラインの問題としてのみ論じられている限りでは、限界をもつ。無論、彼も、例えば労働組合組織を無視しているわけではないが、「第一義性」はあくまで「労働者階級―共産党」のラインにあり、これをマルクスにしたがって「労働者階級の自己解放」に力点を置いて「党崇拜」の可能性や「民主集中制」組織原理の問題性を論ずる方向で処理している。この分析視角そのものは不可欠であり有益であるにしても、「現存する社会主義」の抱える問題を「党の指導の失敗」のレベルに矮小化する危険があり、スターリン的「ベルト理論」（党と階級の媒介としての大衆諸組織の

「伝導ベルト」化、「電車とネジ」化）と同一の問題設定上でその「機能不全」を問題にする傾向と大差ないものとなる。「国家の自律性」「党の自律性」を論じるのならば、ひとまず「集産主義」的「市民社会」に内在してそこでの社会諸関係の―資本主義とは異なる、また、共通する―構造・特徴を抽出すべきであり、そこからは、分業・階層・威信・民族・地域・情報・文化・生活様式など、総じて彼が「第二義的」として軽視してきた諸関係のかたちをつくる「政治」の新たな相貌が浮んでくるであろうと予想される。第三に、彼の「プロレタリアート独裁」概念の問題性は先にも述べたが、その具体化としての「人民権力」概念、およびそこにいたる「二重権力」論＝革命論も、いわゆる「エーロコニズム」の登場をみながら提示されているのではあるが、曖昧なものである。人民の「自己解放能力」への確信は、一つの信念として貴重なものではあるが、今日の資本主義の段階においてそれをいかに形成しうるのかという「主体形成」に独自に関わる諸問題は、ミリバンドにおいてはマルクスの諸言明のくり返しに留まっている。やや具体的なのは、七六、七七年のSR誌に発表されたイギリスにおける新たな社会主義政党結成の提案であるが、「民主主義・平等主義・効率性」の結合としての社会主義の原理がいかに魅力的であるにしても、それらの相互関連、それぞれの具体化の方向は、やはり不透明なままである。<sup>(22)</sup>

## 6 「国家論ルネサンス」の「後衛」?

以上のように、ミリバンドの政治理論―「マルクス主義政治学」―は、彼の理解するマルクス主義と、彼のめざすイギリス社会主義像との接点において生成する、「媒介的還元主義」の思考の産物と考えることができる。この「媒介的還元主義」の最近の現われは、ツァイトリン (Z. Zeitlin) 編『政治権力と社会理論』第一巻（一九八〇年）に

寄稿された論文「政治行動、決定論、偶発性」である。彼はそこで、マルクス主義の社会発展史観そのものを、「媒介的還元主義」の視点から論じる。すなわち、「歴史における個人の役割」について、マルクス主義は、ブレイノフの小冊子以上には十分な回答を与えてこなかった。そのことが、ロシアにおいて「党崇拜」「個人崇拜」をひきおこす条件ともなった。この問題は、歴史における必然性と偶然性の問題、決定性と偶発性の問題として考えることができる。ミリバンドはそこで、「マルクス主義は一つの決定論である、しかしながら、経済決定論ではない」として、「状況の必要」が必ずしも常に「英雄」を生み出すとは限らないことに注意を促す。しかし、ミリバンドの結論自体は陳腐である。すなわち、人間の歴史は「超世代的歴史 (Transgenerational History)」と「世代的歴史 (Generational History)」とから成り、前者は歴史の構造的枠組として長期的に「決定論」が作用するが、後者においては「偶発性の余地」が広く残されており諸個人の主体性や指導の問題が重要な役割を演ずる、と。ここでもかの「第一義性」としての歴史(あるいは経済)の「決定性」とその「構造的制約」内での個人(あるいは政治的実践)の「媒介的」役割が論じられているのである。ただし、ミリバンドの「相対的自律性」なり「媒介的還元主義」なりの思考が、国家や階級闘争のレベルのみならず「社会発展の法則性」というマルクス主義史的唯物論のより基本的、根源的レベルにまで及んできたことは、注目に値する。これが実は、現代資本主義国家との理論的対決の過程で生れてきた「国家論ルネサンス」総体の展開と、「現存する社会主義」内部から生れてきた批判的理論潮流 (P. Bahro, I. Kolakowski, ブタペスト学派の A. Heller, A. Hegedus, M. Vajda など) から受けた、ミリバンドにとつての知的衝撃の深刻さを示し、彼の「マルクス防禦」戦線がここまで広がらざるをえなかったことを示しているとも、考えられるからである。

ミリバンドの「マルクス防禦」戦線の広まりと並行した、西欧マルクス主義「国家論ルネサンス」の総体は、ミリ

バンド的なマルクス解釈学の枠をはるかにこえて、「マルクス主義」の概念自体を、内部に多様な潮流を含む幅広いものに変えていった。一九七〇年代から八〇年代にかけて、①単線的継起的唯物史観から分節的複合的發展史観へ、②「土台-上部構造」論から「存在条件-自律性」論へ、③「経済決定論」から「重層的決定-接合理論」へ、④「階級闘争」一元論から「階級闘争と人民・民主主義闘争との接合」へ、⑤「国家=道具説」から「国家=関係説」へ、⑥「物象化」論から「言説-審問」理論へ、⑦「国家の粉砕=プロレタリアート独裁」論から「国家の民主主義的変形=多元主義的民主主義的社会主義」論へ、⑧「国家と政治の死滅」論から「国家の社会への再吸収と公共的政治の全面開花」論へ、といったマルクス主義の「メタモルフオーゼ」が試みられ、現に進行しつつある。こうした動きの中にあつては、ミリバンドの「媒介的還元主義」は、マルクスのテキスト・クリティックの枠内での「防禦的」修正として受けとられたのも当然なのであり、N・ブーランツァス、J・ハーバマス、C・オッフエ、J・ヒルシュ (J. Hirsch)、E・ラクロウ (E. Laclau)、B・ジエソップ (B. Jessop) とネオ・マルクス主義の新しい理論構成と比するならば、影響力をもちえなかった。ましてや、最近アメリカで生れてきた、マルクス主義をもその一部分理論として包摂しつつ新しい解放の理論化をめざすI・バルビエス (I. D. Balibar) の「支配の一般理論」、J・ローマー (J. P. Roemer) の「搾取の一般理論」など急進的批判的社会理論の新潮流にあつては、ミリバンドの理論はむしろ「ネオ・マルクス主義以前」の、伝統的潮流のささやかな修正形態として、ソ連・東欧型「マルクス・レーニン主義」と同列に類別されるか無視されてしまうのである。ミリバンドが実証資料を集約し「多元主義モデル」との格闘の端緒を開いた現代資本主義国家論レベルでも、「ルネサンス」は、「危機管理の危機」論 (オッフエ)、「正統性危機」論 (ハーバマス)、「財政危機」論 (オコンナー、ガフ) から「権威主義的国家主義」論 (ブーランツァス)、「安全保障国家」論 (ヒルシュ)、「ネオ・コーポラティズム」論にいたる新たな理論構成を展開してきたのであり、

2 R・ミリバンド

とりわけネオ・マルクス主義的「ネオ・コーポラティズム」論は、「多元主義」理論の系譜から発した批判的潮流 (P. C. Schmitter, G. Lehmbruch, U. v. Alemannら)とも「対話」して、実証レベルにおいても新たな視野を切り拓いてきている。かつてのミリバンド・アトランツァス論争は、「國家論ルネサンス」の端緒として今日歴史的に総括されてきているが、それから一〇年を越した今日では、フランスの故アトランツァスから大きな理論的影響を受けたイギリスの政治学者B・ジエツプと、ミリバンドのもとでイギリス労働史を研究してきたカナダの政治学者J・パニツチ (J. Panitch)が、ネオ・マルクス主義的コーポラティズム討論の二大論者として「エロ・コーポラティズム」論争を展開している。

これらのネオ・マルクス主義者たちも、言葉の真の意味での「社会主義」を志向し「人民権力」と「國家の社会への再吸収」への道を探究しているのであるから、アメリカ的「多元主義」批判と連型「マルクス・レーニン主義」批判の「二正面作戦」から出発したミリバンドの知的営為は、その限りで歴史的問題提起たりえたといつてよいだろう。ミリバンドは、こうした新たな理論展開に直面して、マルクスのテキストから離れた「飛躍」をなしうるのであるかと「予見」して「わがマルクス」を守る「光栄ある後衛」たらんとするのであるか？ 確實にいえることは、彼がその端緒を切り拓いた「マルクス主義政治学」の全体が、いま、新たな理論的活性化の条件を獲得し、同時に、「不確実性の世界」の具体的現実と直面して重大な岐路に立たされている、ということである。

- (1) Th. E. Mann, "From the Executive Director: First Year Report", PS, Vol. XV, No. 3, Summer 1982, pp. 416-7, 参照、江上龍義「アメリカ政治学の現状」飯坂良明他『モダン・ポリティクス』学陽書房、一九七八年。
- (2) Th. J. Lowi, *The End of Liberalism*, 2. ed., W. W. Norton & Company, 1979 (村松岐夫監訳『自由主義の終焉』木

経社、一九八一年、「監訳者あとがき」四四〇頁、参照。

- (3) 加茂利男「現代政治学の課題と展望」、木本幸彦編『社会科学概論』日本評論社、一九八二年、二九四頁以下。有根善教「多元民主主義論と現代國家」、日本政治学会編『現代國家の位相と理論(年報政治学、一九八二)』岩波書店、一九八二年、一七頁以下、参照。
- (4) C. Lindblom, "Another State of Mind", *The American Political Science Review*, Vol. 76, No. 1, March 1982, pp. 9ff.
- (5) 加藤「西欧マルクス主義の國家論と政治学」、日本政治学会編、前掲書、一五一頁以下。以下の論述については、この拙稿で紹介・検討した論点はすべて前提とするため、田口富久治氏の講義録(『現代政治学の諸潮流』未來社、一九七三年、『マルクス主義國家論の新发展』草木書店、一九七九年、『現代資本主義國家』御茶の水書房、一九八二年)でのミリバンド・アトランツァス論争および「ルネサンス」への言及とともに、ぜひ参照されたい。
- (6) こうした点については、前掲拙稿のほか J. Urry, *The Anatomy of Capitalist Societies*, Macmillan 1981; B. Jessop, *The Capitalist State*, Martin Robertson, 1982, 参照。
- (7) 丸山眞男・佐藤昇「現代における革命の論理」『現代のメテオロギ』第一巻、三一書房、一九六一年、一九〇頁。なお、E・P・トムソン編、福田秋一他訳『新しい左翼—政治的無關心からの脱出—』岩波書店、一九六三年、水田洋『現代とマルクス主義』新評論、一九六六年、後編第三章をも参照。
- (8) R. Miliband, "The Sickness of Labourism", *New Left Review*, No. 1, Jan.-Feb. 1960.
- (9) R. Miliband, *Parliamentary Socialism—A Study in the Politics of Labour*, G. Allen & Unwin, 1961. この著作を含むミリバンドの労働論については、小林文見『ミリバンドの労働者政観』『中央大学九十周年記念論文集』一九七五年、参照。
- (10) E. Hobsbawm, "Parliamentary Cretinism?", *NLR*, No. 12, Nov.-Dec. 1961.
- (11) R. Miliband, "Socialism and the Myth of the Golden Past"; R. Miliband/J. Saville, "Labour Policy and the Labour Left", *The Socialist Register 1964*, Merlin Press, 1964.
- (12) T. Wengraf, "The Socialist Register", *NLR*, No. 26, Summer 1964.



- (13) C. Wright Mills, "Letter to The New Left", *NLR*, No. 5, Sept.-Oct. 1960.
- (14) R. Miliband, "C. Wright Mills", *NLR*, No. 15, May-June 1962.
- (15) 田口富久治『現代政治学の諸潮流』一七〇頁。
- (16) R. Miliband, "Marx and the State", *SR*, 1965.
- (17) R. Miliband, "Lenin's The State and Revolution", *SR*, 1970.
- (18) R. Miliband, *The State in Capitalist Society—The Analysis of the Western System of Power*, Weidenfeld & Nicolson, 1969. 田口富久治訳『現代資本主義国家論』未来社、一九七〇年。なお、以下をも含め、訳文は必ずしも新訳書とは一致しない。また、わが国での論評として、小林文貞「ラルフ・ミリバンド『現代資本主義国家論』『現代思想』二号、一九七〇年二月、参照。
- (19) R. Miliband, *Marxism and Politics*, Oxford Univ. Press, 1977. 北西丸・田口富久治・網井善祐訳『マルクス主義政治学入門』葎木書店、一九七九年。
- (20) *Ibid.*, Chap. IV, V, VI. cf. R. Miliband, "Stalin and After", *SR*, 1973; "The Coup in Chile", *SR*, 1973; "A Commentary on Rudolf Bahro's Alternative", *SR*, 1979; "Military Intervention and Socialist Internationalism", *SR*, 1980.
- (21) 加藤「政治イメージの政治学」『一橋論叢』第八五巻四号、一九八一年四月。
- (22) Cf. R. Miliband, "Constitutionalism and Revolution: Notes on Eurocommunism", *SR*, 1978.
- (23) R. Miliband, "Moving On", *SR*, 1976; "The Future of Socialism in England", *SR*, 1977.
- (24) R. Miliband, "Political Action, Determinism and Contingency", M. Zeitlin, ed., *Political Power and Social Theory*, Vol. 1, 1980.
- (25) しかも、このミリバンドの「防壁」が理論的限界をもっていることは、最近のニコニコスキの論争において、いさゝか鮮明になっている (R. Miliband, "Kolakowski's Anti-Marx", *Political Studies*, Vol. 29, No. 1, March 1981; L. Kolakowski, "Miliband's Anti-Kolakowski", *ibid.*)。
- (26) これらの点については、現在別稿を準備中であるが、とりあえず、前掲拙稿、B. Jessop, *op. cit.*, J. Urry, *op. cit.*, 参

照。

- (27) I.D. Balbus, *Marxism and Domination—A Neo-Hegelian, Feminist, Psychoanalytic Theory of Sexual, Political, and Technological Liberation*, Princeton Univ. Press, 1982 は、ネオ・マルクス主義も「生産の第一義性」というマルクスの問題設定内に留まるとして、フェミニズム、エロロジー、参加民主主義をも包括しうる解放理論をネオ・クーゲル的に構築するものであるが、ミリバンドは「ネオ・マルクス主義」以前の「道徳主義者」として類型化されている (pp. 87 ff.)。J. Roemer, *A General Theory of Exploitation and Class*, Harvard Univ. Press, 1982 は、「社会主義的搾取」を含む「搾取の一般理論」の一特殊型として「マルクスの搾取」を位置づけるものである (*Politics & Society*, 11-3, 1982, のローア一特集参照)。
- (28) 加藤「ネオ・コーポラティズム討論について」『一橋論叢』第八九巻二号、一九八三年一月、参照。

### 略 歴

ラルフ・ミリバンド (Ralph Miliband) は、一九二四年、ベルギー系社会主義者の子として、イギリスに生れた。ロンドン大学 (LSE) で、故ハロルド・J・ラスキに学び、最初の学位を取得、ロンドン大学で、Ph.D.を得ている。一九四九年から、LSE でシニア・レクチャーラーとして政治社会学を担当、一九七二—七八年、中部イングランドのリーズ大学政治学教授として政治学部長をつとめ、一九七八年からは、ロンドンに拠をかまえたまま、アメリカ合衆国マサチューセッツ州のブランダイス大学社会学部に非常勤講師として出講している。

ヨーロッパの著名なマルクス主義政治学者の一人であり、一九六〇年の『ニュー・レフト・レビュー』創刊に編集委員として加わり、六四年からは、J・サワイルと共に『サ・ソシアリスト・レジスター』を毎年、編集・刊行している。

2 R・ミリバンド